side change

潮 智史

育まれたリーダー

パラグアイ戦の記者会見場で中国人記者から声をかけられた。「日本は強いだけでなく、印象的だった。同じアジア人として誇りに思う」と。「弱小国の守備的なサッカー」という一般的な評価の一方で、海外からは「規律正しい守備」「俊敏で絶え間なく続くスタイル」という好意的な内容も出ているようだ。

ピッチから引き揚げる選手の多くが泣いている姿を、新鮮な思いで見た。これまで冷静で感情を外に出さなかった選手が肩を震わせている。W杯直前からゲームキャプテンを任されてきた長谷部が「このメンバーとスタッフと一緒にもっと試合をしたかった。解散するのは本当にさみしい」と話し、遠藤は「もう少し続けたかった。充実した日々だった」と答えた。代表チームを長く取材してきて、ここまでの一体感は記憶にない。本当にいいチームになった。

就任直後から岡田監督を悩ませた一つが、強いリーダーシップの不在だった。長谷部は川口、中沢、楢崎の名前を挙げてベテラン3人への感謝を口にしている。川口はチームキャプテンとして控え組が腐らないように気を配り、W杯直前までゲームキャプテンだった中沢は長谷部を立てつつサポートした。楢崎は先発の座を奪った川島を黒衣になって盛り上げた。「おかげで自分はプレッシャーなくやれた」。長谷部はピッチの上のことに専念できたという。

W杯に出てくるチームはどこも、プレー同様に強烈な個性の集団。チームを束ねるさらに強いリーダーがいるものだが、それぞれが自分なりの色を出し、補い合ってチームをまとめたやり方も日本ならではの強みだったと思う。

PK戦の決着がついた瞬間、真っ先に立ち上がって全員を促したのは長谷部だった。ポストが人を作るという真実。チームは素晴らしいリーダーをいつの間にか作り出していた。

（編集委員）